

農学部と 農正門の 変遷



現

在、農学生命科学研究科および農学部と称されていますが、その歴史は明治7年（1874年）に内務省農事修学場が現在の新宿御苑の中に創設されたことに始まります。明治10年（1877年）には農学校として駒場に移転しましたが、その後幾多の変遷を経て、大正8年（1919年）に東京帝国大学農学部となり、昭和10年（1935年）に弥生に移転しました。大正15年（1926年）には現在の農学部1号館が竣工しており、次いで、昭和11年（1936年）に農学部2号館が、昭和16年（1941年）に農学部3号館が竣工し、東京帝国大学が東京大学に改称されたのは、この昭和22年（1947年）でした。

このような変遷の中で初代の農正門は昭和12年（1937年）に新設されました。石張りの鉄筋コンクリート造の門柱と、鑄造された装飾を伴う大小4枚の木製の門扉で構成されています。以来、日照や風雨にさらされ2003年3月に2代目にその役目を引き継ぐまで、毎日の開閉に耐えてきたことは改めて感心せざるを得ませんが、古い門は今もなお弥生講堂の中庭にモニュメントとして景観を作り、歴史的な証としての役割を果たしています。2003年の門の改修に当たっては、木材部分を木曽ヒノキで新しく造り直しました。装飾金物ではできる限り再利用しましたが、門扉を支える車の部分などは傷みが激しく、新しく造り替えています。門を取り外し解体してその内部構造を調査した折には、補強に用いられていたボルトや釘は錆びて細くなり、その錆によって木材部の損傷が進んでいるという結果が見られました。木材そのものの耐久性は改めて確認されましたが、今後最も危惧されるのは自動車による思わぬ損傷です。弥生キャンパスには自動車進入路がこの農正門しかないためですが、無事故であれば、現在の門も今後数十年その役目を果たしてくれると思います。車の際は十分に注意して通られるように本稿をお借りしてお願い申し上げます。